
君の朱と花とともに

宮元 綺華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の朱と花とともに

【Nコード】

N9679A

【作者名】

宮元 綺華

【あらすじ】

あいつを自分だけのものにしたい——その感情が膨らんでそして暴走した少年の話。

(前書き)

初投稿作品です。

作者にそんな趣味は無いのですが、ちよつとグロいです。;;;;
それでも大丈夫!!という方はどうぞご覧下さい^^

君が好きだったんだ

ただこの一言しかいえない。君の全てが欲しくてたまらなかった。だからこの日を迎えることになったんだ。俺がお前を奪うことになったこの日を――――

「なあ……」

「何？」

「お前ってさ、本当に俺の事好きなの？」

「突然なんで？……私は、好きだよ？」君は首をかしげた。

「じゃあ、」一歩、君に近づく。「……じゃあ、俺が全て奪っていいんだね――？」

「……えっ……――」

キョトンとする君を俺は本当に可愛いと思った。この驚いた顔も、笑顔も、誰にも渡したくないと思った。だから奪われる前に――――

心臓が高鳴っている。俺は一度深呼吸をした。そして、覚悟を決めた。「愛してるよ。どこまでも、ね」

君は紅潮した顔をパツとこちらに向けた。「なっ……――」

そのとき、

ガンツ——鈍い音が響き、そして君の頭から無数の朱が散った。それはまるで紅い花が咲いたようで、それはそれは美しかった。

ガクリと倒れこんだ君は虚ろになってゆく瞳で俺を見上げた。「
なっ……んてっ……。どうし……。て……。」

俺は跪き君の頬に触れた。「ごめんな。この罪はずっと背負って
ゆくから——ごめん、本当に……。ごめんな」少し前まで潤んだ
輝きを放っていた君の瞳は、完全に生気を失っていた。その瞳から
溢れ出す涙を見て、俺はなぜが涙が止まらなくなっていた。
そして君は瞳を閉じた。

君が瞳を閉じたのを確認すると、俺はカッターを出した。全ての
罪を今、ここで背負ってしまおう。俺は、今はもう亡き君に唇を重
ねた。そして抱きしめた。まだ温もりの残っているうちに——。

もう戻ることは出来ない。

次の瞬間——スパ、という音をたてて俺の手首が切れた。とめ
どなく朱が流れる。滴り落ちた血が君の白い肌を染めた。涙が止ま
らなかった。

遠のく意識の中で、俺はやっぱり君を想っていた。

床に倒れこむ。となりに眠る君の手を、最後に強く握り締めた。
そして、もう二度と開かれることのない瞳を閉じた。「また会おう
な」それが最後の言葉だった。

床に広がった二人の朱が、あるとき一つに混じりあつた。

E
N
D

(後書き)

ちよつとグロいですね。。。 (笑) 友達からもらった絵を見た瞬間思いつきました^^;

私としては珍しい主人公目線の作品です。

てか初作品がいつもの作風と違うって・・・。

ここまで読んでくださった方、本当に有難う御座います!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9679a/>

君の朱と花とともに

2011年1月6日05時36分発行